伊藝騒動實錄 三

へ13
3310
3

伊達賊臣記巻之第三

伊達安藝江府に被召事

附り同人并兵庫被刺之事

伊達安藝他邑謀為諸方之報刺之事

附同人於石城之奇事

去程に伊達安藝は兼而御家之為於板倉内膳正殿
宿所并久世大和守殿へ相談し又久世殿ハ去弱
小補を入魂に深中而付之沙汰為し捨置し

門 へ 13
號巻 3310 3
大正十年八月廿九日 本大學出版部氏寄贈

翌る其年も暮て明れハ寛政三辛亥正月に成共議
去ル年始之御役儀之取扱ひ事先ッことし　三十日も
過ぎ暮し早二月と成ける處ニ板倉内膳正殿房直と
して理非明ニ通天下之老中ニ而足も出ル器量なり
けるニ二月上旬於殿中ニ御老中列座之席ニ而久世大和
殿に向ひ給ひけるハ旧冬伊達安藝守殿由緒有之通家
之安藝守裁かけるにこのこして等閑ニ打捨る事
此人如何成行無為ニ祝と尋られ大和守殿答て曰某ニも
八旬半ば旧冬より事ニ多きに取紛延引之段ハ其中ハ

是非猶延引いたし候と存る夫に付伊達安藝守殿
を信じ身として後見致すべき者ハ服心得難き自身
取登之て後見之事ハ以之外と忌無之気来て伝へる内
膳正殿立て其失禮成事ニして裁許を差延し候て
其儘ニ置ハ諸藏ニ募る事を以て此ニあるへ子細
あるへしと仰られハ御老中方何れもおもしと一致して
左も有けれハ頃ハ寛政三年二月九日御老中久
世和大守殿板倉内膳正殿より御連名之御奉書を以
て奥州伊達家之名代伊達安藝守宗重江御府仕有之

らし候様ニ乱レて伊達安藝ハ旧冬以来病気なりし
事なれハ早ニ用意せられし様子云庫近例候
て観劇しけるハ其初蔵を大切ニ存郡悪法七ヶ条
の罪科を書して原へ手紙家老此度手書を以江戸へ出
さるゝ事本家より方論證拠所成上ニ大事ニおゐ
てハ甚し事なれハとて之へ申おゐてハ数中江戸ニおゐて
殊ニ酒井雅楽頭入魂なれハ如何様ニ謀を構ゑ其
を羅ニ落し[illegible]ハ其疑ひ江戸表ニ安し自成家
八経ニ見る事を当事成り[illegible]時既ニ廉忽ニ登城

家老なれハ小重郎安房と両ゝと門張ニ及ひ登して取ゝ
為ニ威宛子ハ一命を捨て登城有し[illegible]ハ様ニ其末ニ御
為ニ相過てハ末代まで長ゝ成之事又但是ニおゐて事を
計ゝ評定一決するなれハ一番ニ同月一日ニ皃ニ以て談合
家ゝ不思下知して常限り防戦し運常様に白
并上ニ様子を聞君を萬事取計を後記ニ心得之ニ相続ニ
主君と共ニ身を亡し何ニ思を残置して無き速ニ
見ハ我家ハ死生を與ニ萬事後人之善悪
茂其事家なれハ家臣ニ不當を以百代之名を見せん

むなしく候只ハ無禮を振ひ人を驚して己を急こ候
自ら心淺く要害之戦場に向てハ大敗致し家は廃れ加ふ
は恥引のこを見るへし悌之氣魄怠之器と尚ハ候
是を元来家ハ儀正多く中にも吉田兵衛伊賀四郎
兵衛ハ浴の時聴耳目之所ある處にして栄利に心を寄
ずも小重郎に添て我を流し給ふ梅田彦九
之後も十三歳にして賢なり父正成之遺訓を守り二代之忠
臣と称せられ名を輝かし候沢や彼ハ年二十二歳
にありしハ笑ひ給ふも事ならん親子も亦戦

西ハ十三にて九つ是限り威光在りしと忠信にて報判
此等之兵庫謹て来り國之為に後ハ忠心を尽し候に
只今家之恩を荷ひ退て御旗を取り賜はりと
神妙之者なれば西藤家重用を添して我家之為
候ひ有りと称はれ吉田兵衛伊賀四郎兵衛人之為に兵庫の
蔵長兵衛心を添て補佐し居り進み兵衛に同光方にて
郎之蔵四郎忠光之力をも添へ是此度兵衛部分
改め家にも影見と顔を合し候へハ兵衛も
御為中兵庫様を守之第一と心得候御取及候

此度之儀陸奥ニ上方危事有て取見候ハ不意
之政宗に申けるハ当時御上京有りとも帰国なれハ安藝
守て在りけるに不意之首尾ニ候ハ下へ止して日限之積も難計
以て之進退被成候も難成候急命ニ限り有とも不斗なれ共
是ハ一度出陣之義候て在り当時安藝ハ備前
之謀を承て仙臺之領分ゟ其川を列者に馳り甚燃
し元之之居城中将行直を以て譜代思顧之者共
人と召仕せ候請太若党被是迄侍十人足軽中間ハ人数
連て仙臺之して罷下けり

伊達安藝仙臺之諸士之勘定之事

附 家臣之謀之奇事

扨て伊達安藝家ニ重ハ仙臺之城ニ在り当番伊達
上野之我西して安藝ハ殺被手書を以江戸へ通達す
斯りけれハ仙臺之諸士名残之惜之人と我先にと群集せり
安藝まことに様子存て西之而至変ニ新しき事なり
治世ニ於て気を忘る事ハ武門之習い主之患之重て死を
憚へ候ハ人臣の心得なり其外殺江戸へ相通て助
謀の族に斗なれ共老に之道も悪逆之族多けし

志を得て逆意を恣にして國々を定めんとせしや否右に小
十郎大将の器量有男なれハ私ハ不去不陸見継参
候ハゞ当時猿ケ城を取けら候の事も有れ理ふ
足にりて向ハ小室自分を大将として當像を堅固に构
柄りし要害にて人数を配り敵をまち兎角に兵粮
不足なりけれハ両年七年小荷駄をも添られん事を思ひしも
ふ寄従永以沈陣にハ極にて復綴るにも是人の退屈して
一和せさる所に長氏が勢を聚盛弁せられよ大将を海当
時ハ喜根生じて必人和せん人ハ和せさる時ハ落城せ

基し小十郎ハ代々信長につかふ歳とゝもに四し臣先君
に従ひ有るなれハ只其下知を守ぶ事に聊不合の心に忠論
家臣ハ前代譜代に歴々として君に大事に命を惜
みなる所存に人先氏庸に至りて事もしけれハ百に一ヽも極て
不能ある時ハ先祖の武功をもとせしむる所を存して直に
持に頭にかゝ所存を吝りなるに世にハ恥辱を解なるや其
上西に急津東て伊達と氏人を長盛し天下を雄の如
称せる事其信長公若が称事に及んて古甲斐なし
働して後に面目を向無き也寛永年中に服部

東天竺一揆を起し天下に帰する代を及ぼこれ筑紫九
ケ國の大軍を引て文年に亂て起く働りし所詮
城に婦人男女泣々叫び一度ならず仕たる所なし身
得ずとして我が代頭取る衆心を治めて城を守らず
當之年ハ起く何ぞ働りし年を經る事なく壽手心
悉皆風なし其實を失ひし事よ是を以て武門ハ恐討文
ハ幾度之仕儀なり龍を治めやまし当して其後大乱てあれ
ノ切て有る福を失ひ壽手何百騎乃至も敗軍せん事
治定なり依當家之國法將軍家猶之帰る所を知る道

事落されて一入軍ハ弱くして遂ニ殘人到城中強し
と風聞せる形勢の爲ならん然れハ壽もなき壽昧常に勤せ
所に皆もよらん其時社あいにくの處ハ我國も斗當庭に往
出先引之亂之楠正成千早の城強くして此事成て
人々の心得ぬ事に成りて小條久代之熱心昌經之城之志有り
陰陽壽正ハ安之存知之所存也ハ文論す事ハ不及
忠議と振ふて積る身を顧ミ一生之面目
氣せめ志し之我之代之君之恩を蒙て何を尽くし
死を遂る事して不思之惡名を家に殘すやと之氣勢也

かくとして答けれハ伊達安芸不斜悦てまちける賊
列を離て仙台表を前立して羽立白石の城に至れる城
主片倉小十郎方へ招ひ出向手を尽て本城に伴ひ来れる故
度々の大息紀て是を定られ志を感し此上ハ只江戸表の
首尾宜敷仕而よせ給ふ所思ふ本行露事り身ふ背き而れ共
到国元へ届正ハ女と本心ハ撒而よ宗と留まり門下物の
食無を美を尽し料理の寒諸知ひ新るよ示し
安芸殿ちして来客を致し接二て笑立れしも片倉を
而ハ名残おしみ気を尽くして大門前まて見送りけれハ

安芸達て辞退しけれハまたりの此て家老の職ふ復く
也看也ハ伊達安芸道を差多日数を重て当帰江
戸表へ赴ハ留りし為る職ふ帯代の忠臣と人々是を美
談しあるとかや

伊達安芸江戸着之事
附 品川境より安芸に書翰之事
似筆之謀計之事
附 難面忠信忠孝之事

梱も江戸表ニハ伊達安芸を待ける所ふ酒井

雖然頭殿之御内を密にたのまれて事如斯と正直
に披露有原田孫兵衛に言せらる並居しとも付添れしうえ
玄部少輔くて居りて藤谷に早速原田平兵衛内證しけれ
ハ甲斐守も亦其後思ひける事と存し候得共也後日對
面の所存殿ハ何事も思て不顧と斗り聞へけれハ其
端藥に組せらる處も其時揃之施物御心を以御藝を出
候せもしを事々之東京にて在る者大息は不敵に
生得にハ云ふわけもなく一ツハ酒井殿之所藏鷹を後備之轉
因え判的大事に及へ候とも召出え案りれとも無りけるに

藝の身にあてハ世に名殿様之相手して即て御近習藝
ハ早ミにて虎之ちしと御居所江戸表へ至着しけれハ今度ハ藩ノ
事に思召を出られし此處道中ハ江戸屋敷之田村殿
か へ藤の中屋敷よりも中し送りたれハ田村殿とも度々
道中へと速ひをに由ありて土屋輔に頼みしとかや
其後猶はしまて熊千代君之御目見致され此時熊千代
丸十二歳にて成らせ玉ふハ屋ミ相成を兼りたる御藝をも見られて甚
御感ひあり御藝を上意あり又とゞ御容貌何か希え御寵愛
に御成長あり御と召出とすへしと謹て申上候とある

亀千代丸ニ候而ハ未若年ニ候故我為之大事ヲ思定嘗池
ハ策当事ニ可有之哉ト見計ひ其れよと云候
我れは安藝潤色ニ流して継候御家を以御家督
の為御家を補佐候事を定めし職にハ候ハゝ君の苦
ハ献ニ足ル事ニ御家の為メ全く計略ニハ候へ共何分
疑ニ而ハ下リ浅野松平ニ対面して両人ニ頼事也
随ひ参り初君補佐し来らせ候事厚く頼
美作守も浅野中務大輔ハ悪人ナル故良からぬ者共をして
人々を食し家内を悩し心をぞ酒色ニ耽らしめ服も酒も深く

も移り送り来らせ人返えしくしも承引心得無かりしとや
然れハ安藝守ハ我も是を知る所なれ共不心得せりしと承
服を退出致し候ふ当まれ共浅野ハ心安せしめ食お参り
当主皆謀りて我か計して二心無きこと故に持参りしと心掛ケ
猪手役人にいたる迄長屋不残織之掃除仕置候事申渡せし
篇付て上下共に旅之用心を暁るゝ事なれハ申分無け
逆徒之謀(テダテ)を企て遂之為用心之為にも来向ニハ御出ニ相成候
首尾不一方申上んを今振し迄致し為之述べ年に
戸家中も幾たひか又甲斐の逆意の権威に恐れ以て御承引

夜ニおゐてハ修理一應ハ見立升り為済ニと問来る人
も無用ニ当家ノ用ニ補ニ宜しきニ付品川総家ニ用院ニ仕ハ後
兵部斗ニて日ニ人目をはき是非ニ而十二年ニ而理知ニ成り
等しからぬ事月積て我心若家ニ誤り後悔而
且諸人後覚ニ族相蔵を恐怖ニ至るもしれハ御君を初
而ふ所存心易ニすへき事ニ付而ニ安藝守平郎
不患居ニ無何と心得居る事ニ而後々ニも兵部少輔ハ権
蔵ニ及ハ其後も申すまじきと存寄と思ひ安々ニ伊達安
藝当源を而以後ニ相しまし世ゆへに社るへきと申し

安藝ニ思ひせしむ乙を安藝江戸表ニ立すしてを
世中ニ候事限り有りし兵部ニ家老原田甲斐を以
至急ニ候段申送り安文一對ニ書をは安藝守迄遣す
丸当所ニ於て甲斐生得悪味にして毒ニ生はもはかりぬに而
総家ニ心中を見しをはかり少金にいへニ小出者一腹を合
此ニ於て札当を来るに子細をかなハしてはかり有る

御筆謀斗之事

附り 熊田甚右衛門忠儀之事

去程ニ原田甲斐ハ元より原田甲斐の小身ニ而世ニ兵部

味方なされ候ハヽ西藤方へ不行して土州方へ行て様々

書を見剣しかれハ早速甲斐を帰て相談し候処ハ甲斐

申為ハ此文平太に西藤へ渡す為とて無勝利を

切て見れハ

此度其方儀前有之よし別而大儀ニ存候然ハ若輩

家之為ニ存候而此度及之儀ニ候段之忠節之至り依之拙者之

何分ニも家無難之儀思召候而亀千代成長之上宗を

継せ様筆端其方之忠ニ有之然ハ土州事ハ酒井

殿ニ親類ニ候ハヽ如何様之調儀ニ及ふも難計其方も油断

不可有候得共無油断様ニ近年土州甲斐殿一味之証日

斯之筆共ニ候ハ兼対面し上下者多筆相之取しれ

候者其筋而紀心底之心得共之成と存候而萬人之口共誹

之様無之様申共ハ近ニ別書を以読候而猶又残書之

至り心底察之のみに不宜

二月十二日

一の信翁

孫之丞に遣ス事右為原田殿ニ而亀角紛為之常若筋

伐騒筆紙不尽

別紙書之覚

近年於京都甲斐并諸士之上ニ而茂政道緩ク操り候由
義ニ付而ハ此節より猶以小者迄難義勘弁致候人ハ尤以之
宜敷取計候ハ忠孝代替ニ思ひ候ニ付是迄之通り道理ハ
隠れ無之候得ハ後生一片之心掛ケ肝要之事ハ勿論
甲斐殿ニも得と御入念被為成以之覚ハ其前々之通り御引替
万事相心得候様思召候ニ付何事も以之御済可被成事
来ル節ハ御家老共ニ無之用ニ而上屋敷ハ向島麿
高門之中屋敷ニも致シ表ニも致し役ニ而表向ニ而も隠し候
悪口識ニ口惜キ存候間御断ハ

一　何之時も京都へ諸国小者迄難儀勘定候役之上ニ候之様
貢ハ此節より猶ハ両人ニ而能様之事ハ隠れ無候ニ付
ハ於甲斐之事悉中ニも頭并ニ付中ニ両人之国元へ
挿込候是迄先々勘定分かへ候之様之事に候ハ随ハ之而
従之通之事

一　風聞之通連判帳ニ相拵候而綻ひ候之様子

一　猥隠居生義之儀ニ付甲斐并京都ニ而屋敷御引取
是迄事之者ハ御家之役を殺しハ相下知候ハヽ
後年ハ中々之事

一 隠れなき物好之酒を売出し候事、其後彼毒を密に御方
へ美酒にいたし為送り候得共、禁制に付口酒を送り
候事、不審に存候ゆへ取上候て毒味致させ候処、其者即
死いたし候へハ、我等毒殺いたし候と相見へ申
候。其毒の為相果候者も不苦候へ共、亀千代事不思
以我等に為致候由、其後甲斐守下之者(?)に申付、其上鬼役(?)
存じ不申候、猶又浅海(?)千葉之者に無足(?)之事に存候事

一 今村善太夫、横山弥次右衛門(?)、原田甲斐(?)其外(?)人数(?)
願之訴訟之事、右之者共(?)に浦(?)…不可然(?)

仕へ(?)と原田甲斐に添(?)有候て口惜(?)次第に存候事

一 兵部少輔・甲斐毒薬を以て亀千代を殺さんと企て
家(?)思(?)彼多田(?)氏(?)是を存候て亀千代に飛(?)…計(?)
薬を心味致し、即時に相果候、是も彼等か企
…討(?)、医師・料理人、亀千代の例にて承(?)
仕、男女八人死罪に申付殺し、何(?)…其(?)外(?)…
事

一 其方(?)…登り…速(?)…(?)…
柄(?)…

果ハ其外中甚を度事共致候ハヽ急度可被仰付
何かし可申候　恐惶以上

安藝殿　　　　　品川道閑
　　　　　　　　　御答

甲斐是を見て此書安藝へ見せ候へハ何事ぞと披見之上に歎を流し
甚り忠り此書付御前安藝に動乱を起させ隠居を被致せ候間ハ
側来に味方し名分を以てと酒井家に願出中付候得共を聴
メ去年に持安藝方へも入る其文之回

此度其方当地に登り候所云ハ自分之事ハ勿論
表先進而中も不分明之様申物ハ不及申無理を
為し其無之日及申旨当支も不顧有様一族伊達
し当月一上を不保家と一重に御前為亀千代御ため之に
一家中之仕置を無双之補甲斐心を労し政家取計
国家穏し亀千代無難に生長候以上ハ候方之抜群
勿論こいよし其事を中に立ハ偏及迄ずし（もふ）得其方可
就其補甲斐に何とし中分の於て以ての懲者に何を信じて
科せて三のを衆に深くと企ハて申　何を忠臣ならんや

畢竟去ル政府ノ上ニ於テ不當ト存候ニ付候段御返答
自此方ニテ何ニ為世ノ為ニ無御座候ニ付帰京之心積ニ
御座候以上

二月十二日

安藝殿へ　品川弥二郎より

と謂ふべきか何分甚以大事ニ候へ共自然ハ見込之
し候たり夫番是迄預ケて是非安藝守ニ則て
渡申候ハ安藝も心得つくしきり打合も是ハ夫々ニ相
そしと相見ヘ候ニ而依成を弁ちし候て一度ハ発為之

是度ハ然て何ぞ関君等力を合せ候ハヾ此人ニハ能も
天狗ニつけたる様ニ説君之足ニ候はんハ不可存候
又発言事も差支申間書ニも不及其番田を至し候ハ
綱家之安藝之正意ヲ無理ニ宮本ニ思召申へ候近習
之内常ニ来る所之小姓之番頭相持年ハ是を防いて密談
せしめ為年ハ中程居候君ハ少年之無番ニ候心得不申候
於申ハ山里遂ニ甲斐之大有用之中生得利ニ良薩摩
男子之ハ候油断難成存候難ニ候思召を正しく為候
と存候ハ然ハ其有害之安藝守宅へ執窓首を乱し

兄よりも弟こそハ年ハ安藝が方へ行對面せんと頼綱家
ろこゝ帝を逃られハ安藝共て人臣之職たるや私之意
恨に身を捨て君之為に帝を果すべき計にて伝染之詠に
附て先君之所思を紀されし事ハ如何ともすべき事なれハ年
八郎と思ふ當時江戸表之聞者甚多之疑ハ所從者番を
始逆徒之密議ハ此程之謀書等之疑惑なと不止事なれ
ハ安藝守てむし頼むべき先例之所書状を封し差
越其所返状せん頼氏見たる家之を重て伝を家なし此たる
返答に上阿れと書状を年八之に渡し當年ハ急ぎ協り

是を聞に総家之披見有て阿ぞられ果さぬ見え來り
一和を徳氏度ハ平八郎以安藝ヵ方へ遂り是又徒党に謀
書を用る事両手に届しと思ひ書られし二安藝
下事返答と定居し故に偽銭落状を綴ヵ如り能々聞ハ多
謀書之事ハ吟味せんハ是天下事しや前し少ゝも無益之
事之賊徒破んを出れましめ自威之仕置之人を難
計者捨置かへしとしかし之所総家之も思ひを押へ留て給
従之不及其後伊達安藝無田甚五郎を殺か弟
当八秋の宣し思ふ不変品川御殿之濱田去る番を廣

主家之君之書状引留候事無絶間敷之儀有之
彼是愛心候思ふに付元品川へ引戦所懐中之御儀
難儀ニ而当惑いたし候ニ付ならぬ事なれバ熊田ハ不届之
逆賊成是等之譲を蒙し思ひ出何様之企致しも難
斗我ハ先こ之影身之添好戦之難を防居候し品川之
御事大切ハ不及申に今度只之為ハ伊達家之存亡并
こゝ御身之懸り候一大事ニ及ひ候て足下之御働ニ存候
是足下こし足下之命ニ替て何かれ君家之御一大事ニ候間
なれハ主君之為ニ操守候と申ハ第一ハ安藝殿ニ勝て嘆

御為之忠臣成すゆへに其身を反逆賊如何に謀るも我々
深く待居り何事も是迄我ハ鉄の覚悟　先君之御事
心得り我心易からぬ而初君之御側には妻我命に恥あ
なれハ気を遣し御為ハ早く品川へ立戦て先君補佐
せぬ者也と申候なれハ熊田が手引し御危成候如何にも
川へ御親ら護りし其気を御乗出と是ハ熊田ハ
川ハ執权保平八を以御目見いたし候熊田何ともなき
手明々殺め安藝の下知を請し御当護之為某何ぞ謀事
御忠孝を上付命こと下と謹て申上候総宗ハ熊田ハ近

なされましと落涙有けれハ流石鬼神も欺ク甚四郎
并関も思案し始て涙を流しかれ越田河嶋ハ房
然ニ忠臣義士多き中ニも伴造斎藤忠諫日月を貫りと
云ハ厚し又妹婿冷泉且ハ豊後綾女重光初君備後
なり寝食を忘れ大儀思を苦し第一の人是又臣也
諫の〆中ニも当家にあれ共某も国家を執る逆臣之肉を共ニ食
へき讒人事也と親ニ知らせもとゆらハ従先ニ申に合せ人々
と其外佐ト四人大儀之経盛也陶ニ候す也我恵せして
國を治る事不能彼ニ當忠臣阿曽ニ不知社なくても我

又黄泉ニ有なりとも汝か忠ハ生々世々忘れまし若三里臣
武藝の常ニ好み天ニ告天神地祇忠臣を守り給へて武總
家の命を与ふなと祈誓致せしに又代々なれハ新
忠臣なりと云共我ハ義を有の事共なれハ忠功なりと云ふ賞も
當事も不能我の命も旦暮日と思ハし陶出て弟生大當心
地仕有りと候得共人ハ甚だ害間を押へ難き程詞数多く
有り嗚呼院の中ニ京田甲斐理ハ想事ありとしても姉ニ宛
職ニ日参之押込有りなから安せし事白称なやかに少し
やれ申上当云ひ極めたり某臣倒小ニ此云月ハ陶人共小指ても

若年ニ而も短慮易く思はれ乃得と勇気両発し見えけれ
ハ綱宗乃短慮不浅ハ短心を安んトし見え為

原田甲斐奸計之事

附リ板倉内膳正撤原田甲斐對面之事

板倉内膳正諫之事

附板倉内膳正撤居り諫之事

扨も原田甲斐悪剤ハ智謀有之ニ乗し強勇有りし事ニあ
有れハ綱宗之思ひ一反織幸し比度ニて様を思ひし居るハ
先ヶ品川ハ屋敷の剃客をもて陰ニ於綱宗公を刑殺

伊達安芸ニハ見ゆ縁ニ織ん能ハ何ハ公論之事ハ眼之
敵へし若又打思ひし事と思ひ斗指差ハ此者ハ論絶して
其家を安芸小原以せん何迄ニも安芸を羅之是之事
兼之内ニと思ひ安を思ひし濱田秀番を呼てし居ハ綱宗
家之眼を得只一討之刺殺し見え比者仕様しぬをしと云
有れハ秀番守て下し居かハ今やかし早り役あり之ニ帰
陽をり熊田若者刺り安芸方よりハ側之所定兵か
早叶絶しとして有れハ甲斐守よりも安芸之室まで安芸
之先ニ織されたり扨之宗根之ゑり之鬼角生し居たる大

実に妨し先被の者織をおこらん迄良策して見へ
並ハ方番と奉るハ安藝の家臣中野修理亮内ハ何
作行かさ程なし然るを強勇のあし上云者ハ甲斐加
ふしとお笑ひ云匹夫何程の事かあらん謀て生捕せん
殺害せんと申す方も内に何某迄須田左衛門ハ梅之助尾崎之原
田ハ手段をなして深ぬき安藝まて智謀をこのんて隙をうかが
ひハ石庭ハ堅まてハ奉り殺を始めぬ奉る甲須原田甲斐云
類に向と奉るハ安藝殿にも王乃身分上ハ勤役近き小者と故
なるし先日と甚策之弁立なる者必て蜂気應変謀ハ安藝

をこ給せんとは存ぬれ共深丈を知らざるのし万一事叶ざる時
某形問を形されん為にし此頃酒井殿早速帰許容なく
披問と仰付し役所同意仕入足之事申さしく其時某に必ず
ご責人者をこくこと一刻之无状も及ぬ間安藝ハ老練者なれ
猶応に於て貴殿ぬれん事必定之酒井殿ハ余忠之
上ハ形問に仕方陣をして其為をもらハ忠弱勝之帝正内
宝之里入来る者辞に應（ヒテ）し始めて酒井に触らせ
忠清殿ハ西誥之雅楽頭殿も無き気を呼て打結せられ
度れ故ぬハ早速之果之道にして勤役あり酒井殿任

皆ハ何も安藝之ハ家中一味之連判帳并證拠を取集
書面を取持せしよし何ニ手證を取しも為ニ詮議及ひ
且又當代ハ老中何れも帝乃魂家臣ハ役人共ヲ下知て背キ
家とれハ今度之儀存分ニ申付るニ其儀ニ不及候て宜敷
板倉内膳正一人安藝之方人なる体識ハ武人之下心量及
よふなさん御代ハ此先立縁之老中之列ニ加る奇貨ニハ存
置ニ為申し一瓢せし處深染メ剛強成責許り毛頭不勝を
燃りて事成座し未世之名を残さ誰か欲を知り
好ミ而さへ安藝やる之誨ひ甲斐之私議し板倉殿ニ手入

せられ家を奪ひ置事安藝之すと申されたるハ無詮誨りて
密書私改之連判帳始メ総矢之を多し急ニ甲斐を呼
下委細を語りけれハ甲斐ハ少しも動せす是神並ニ不慮仕業
之狂途参り不得ニ安藝ハ方之謀と安藝を絶抜問
を取ニ使り板倉殿へ手入之儀ハ様子も萬事存知て手前
を取て並ニ濃き急ニ計り見申さん連遠而家之内膳正殿
不使を掛られし處之今之父親所方之扣りしを尋ね甲
斐對面して語き元しハ捕え役内膳正殿へ急て此旨見届而
度急何りと云せ表向ハ急速急ニて難叶而娘子之節之為内證

此目見え候而何とて付届ケ入用何程お掛り候哉三ケ之
まくなく其外又子之禮も此度ハ相手厚し先是ハ當座之挨拶
成とて今子共為ニ娘之方へも是ハ指添の常ニ而遣申し是迄ニ
差し此許を以て志存ハ女之新ハ大慶成前方之所ハ為存
事娘ハ何分宜く申中申せハ人として板垣殿之此度御礼と
至り娘ハ為其御礼ハ女も甲斐音信被心得候の思召も宜
御機嫌中し上ゲ小板垣殿成程對面せ之猶手代頁ク致候由
と何而も是存札ハさしての東田心を見して大慶存候之進被
調へ家老用人ハ其他近寄役人門番迄も取扱候て其を相送り此

目見え之儀為ニ板垣内證之取斗ニ而意次ニ此度指揮之上此度
伊達安藝諏訪ニ付何角と其當心を相應入念し形心易り
對面せし上ハ此縁ニ此猿旅を申中申せと後ニ御前ニ之
果心得形成為屋ニ事ニと存知れハ甲斐為ニ御懐しして此上ハ何
色の色中へしと云ひと心を合せし逆意之事共有と口之
云如其何分なし上ニ當ニ内證之取斗ニ而御之後此近為見之
在中村ニ至れ為品ニ是ハ指導相ニ而手のこの持参て甲斐の前
ニ並届て了時ハ内證之取扱ハ御心の次第為此方年ニ而東田様
ニ申々よ我様ニ以て天下之政道之立在ニ為才として形為不平

之品ハ月を探し不忠不孝之悪人に對面を免せしハ只当之
訳一下座り申ん為誘り條之旨要ハ重キ評定坂之於て勝之
記ハ有りし又品ハ非義之様に見へるも中之徹し有之品ハ指
て悔る處りしと云 指も又無要に候ハ只一人ハ本田甲斐一生ハ京之
賈を失ひ惣身之冷汗を流し早々営輔へ之言ハ悔
り塞後日度之對答之も内膳正撤忠情之之権威を掃
へ所様分之理非を糺されしハ比時之之庭を出て去れし所尓り

板倉家所由緒之事

附り板倉所自殺之事

時之寛永十四年之秋板倉主殿之為重綱ハ父内膳正重昌之
先達見届度述父と一處之肥前島原之一揆陣之頼を所老中阿部
豊後守撤可為ニ相升不肝之之伏重綱年十九歳正月
父重昌討死せられ城責ハ不若重昌を以て又一先陣を果れし
器量人なり悔系之上内膳正殿之別中島正一万五千石之内一万
石を續ぎ五千石ハ次男甚三郎に渡之筑後守重矩と是配分す
其後大坂加番定見附次番之所所勤を未度々お勤せり代
將軍家綱公御代寛文四年正月大坂御城
番役に仰付られ五万石に加増百人を加り之見名内膳正と改

摂州之内ニて加増一万石被下 同月十七日大坂着之条着し先
役阿部摂津守ニ代り勤役せしむ 同年正月二日大
西国雷発其夜戌ノ刻ニ大坂御城天守之小鯱ニ落小雷
落雷ニ天守へ燃付間同月朔久保田半右衛門試田板倉殿ニ告
帯曲輪之番之者殺乃所者之由落行ミ候様及ハ出候て付
御城ハ板倉殿当番大番之番頭ハ四日ニ在て其番人せむハ某歩
番浦へ引元番当番心得り元役より申番所を離に付
番頭城代并山岡播磨守ニ申て加番大番之雲ニ相談せられ
是元天守之上ニなる事 衛等く只御城番西門櫓之上へ蔵

之米有之を消て火取り鏡之火取を取り上て夜中過ニ位
を入蔵之及候之其夜天之刻之天守不残焼候二日
目之卯之刻ニ重之天守不残焼落其之后外多門ハ下
案内頭取と之御櫓ハ焼落人一人も損せす 此時大坂中
之町人共御城内之様数人出之为米面所と存じ騒動し逃
散候是を聞る者小町奉行衆已してり注め度候 丹波
当日役人旅を以て土橋ニ出メ同月八日丹波当家人ニ事弁候目
心八十人丹波当家来廻り加らめ大手之御門ハ青山因幡
当家来之一番之土橋へ是ほど推して営家が私之内ニ指正殿

京橋口ハ橋之表ニ鉄之仮之柵木を立横矢を入て仮門を立番
木を割並を打合し内ハ仮之番所を立与力三十騎同心百
人ニ而地之下縄ニ而附与力と我家人中甲冑を着三拾挺ニ而
を着上意度相詰候加番松平伊豆守人数ハ打寄り程
之謙之鎗鉄砲を標之備相下して之を消し日後弁候
頃ゟ仙石猪兵衛同人数を差揮メ名を清之助
御と云者之鑿之小船へ乗りしを板紙屋を以御手つ引
切て之を止メ御厩之思召し時之尼ヶ崎之城主遠山大膳
亮幸利八十騎足軽四百三拾人引率メ之之来り消をる内

蒙り三丈野道之消を以て城代土山周防守ゟ御
中にも此ようし在て京橋御門之板屋之立置る仮
柵を折て見ること板ニ紙を張之内張正板を踏之身仕差せ
しし而御番所柵木を仮之常之内張正板用意して
並ニ相詰ける急度之事ニ付遠山大膳亮幸利
其後世上之云所ハ武功を感心して大名ハ本田大内
記松平甲斐守遅延ハ理ニ候也受葭軒と云
三字を書せ席上小足を掛並下茶裁をさせ手紙野営
をも度る堂々ニ扱て哉之求る心ニ而大坂京都へも仮願を持

芸ハ拙筆候ニ付も如斯候得ハ是を書れたる理
為三竹法眼式時此二字を用ひらるゝ事を聞かれ候も
ハ板倉殿若キ人なるゆゑの才を立る者を戒らるゝ趣意と
段事を答之由一言ゝ事にて察し我か心得ニ可成今
手書連判之怨(ツラ)恋り之類り易きゆゑの事なれハ実ニ悪
了簡事ニて曲(カネ)事物之早(ヒ)計(キ)に致シ候ハ能々も心得へし
事ハ無之様ニ為御太切一分ニ不相慰候様心得られて猶
如何成ル共ト名も義事ニ渡て宜敷覚悟ニ成勤ハ中ニ存寄
事ニ而も人ゝ自然ニ生れ得て実義成事相考候ハ誠

供たまゝり音物を披露する時ハ畏て聞候て其之音物
之趣しく載て後体足せられし由人之為の了無益之事
揃まゝく、集て揃ふ事にせられしと云内膳正ハ家親
類之内懐ヲ右人ゝ之音物を除き候外をハ家来に配り与へらる
式人聞て曰ク於常ニ進物載るゝハ如何なるやと尋られハ
重器等をも取ふ留ニ在君父之御用物にも載さる
事ハ無りしとと云刑部ハ何程ニも勤候ハ誰の内縁
を君より求め此大小之進物ハ品ニ依て秘蔵上より拝領
仕と存る者頂載せしと云人ゝ掛る心得量人其外大老酒

井雅楽頭なくて権威を振はれしに於此人計り
隠忍之中々世に無相し多くの人々も目を付けし
とかや重能奥領伯耆守重吉二万七千石近代備中庭
瀬之城を江戸屋浦下谷池之端に移し被居肉猪之重縄来孫三
万石近代奥州福島之城主江戸屋敷浅草新町なり子孫永く埜
留せらるゝ事なる

足軽本戸弥平次娘之事

附安藝殿了許定旅之事

無類女浦評定所にて之事

附妙屋六左衛門忠孝之事

爰に足軽大将本戸弥平と云しもの彼か女房ハ御年之
頃にて伊達安藝守の殺年栄之君事ありしか其後弥平
か妻と成て娘壱人設けしか其後中の目引と孫成長せし
を楽み尋る元来我治之者なる人宗氏ハ不幸て首尾を空
自江戸前番なと頼有役人今村吉在衛之人頼にて何率
異花の此栄縁性と申す計業来ハ彼名書少年も見る
中度もし頼みなるに常附吉在衛玄瀬の影ゟ非常之
栄茂之娘り人も多り在此玄なる日人易事迎ゆ引え

女房の例にて小用を足させ不便を加へ若盛なる（此時娘は十一才也）頃なる
此度併連而藝者附き給ひ弥平女房大に悦び早速見世して
獨りにて情をいたし来る而藝は海近て思ひ為て心お
たるに而満るに至歌みに名高く早くに原田甲斐殿に抱せ給ひ
来りし處に名高く芝居にもして送り併に娘を己の定にて了元なる弥
平急用有り追々為りて弥平かる老々は何事なく人と
胎來にて家内も聴引き時に甲斐の方へ引取れは不宜殺と
又對面しの小弥平に感じて此殺而藝は江戸に登りせし去年
為に縁の嚴罪料を縁へ報ひしに付て登之せられしにて承也條

甲斐を殺害せんと欺きて用心最其家を滑り其方女房さへあ
藝を殺害せんと思付き我る用心せよと云来れは謹案する
夫に訴るに兎角其返答も不出甲斐其心を察し隠し
是なる娘引取りし後是を知る者人質をなし置く其子の
不便なれとも早く一味せよと延引あれば殺さんと弥平孫驚き私
事年寄りて何事も種々若年以来に付其娘成人為致
親に離せんと楽に千萬にも替難き娘の事此上は是非
与一味せん併連れめは心柄しらずに家来は依て是ハ不残
申し此度の儀を企人中に止め叶ハ如事深くを見つ以ては娘を

先達ゟ果し杯と不覚之泪を流しけり栗田ハ暫くしておの
汝等も一味せしからハ女房にハ含ミ之色を見せる気色有事なかれと
云聞せ又ハ逆臣弥平神文之血判をなし甲斐諸元而甚宜く
帰り何気なき体にて女房を呼寄て其夜ハ寝にけると云はれハ
弥平畏て退出す毎日まゝり弥平若き頃より女房に向甲斐様
何角御用之有之しる由申すと云はれハ女房不審成に思
ひけり然るに甲斐ハ先日之ぬり娘を殺さ意を弥平見せり其跡
を逆に一味せ居りしと云はれハ女は大に驚き扨是々しらすると申
せハ清掃なるや我娘の殺さるゝとて泪流し左様へ何と毒害

成ハ只今弥平に甲斐殿之一味仕らふと思ひ居たり自ハ氏家くし
女ハ未練なる故に親子ならる由も殺しなとと怒り罷る甲斐
背て其身同心して若尾殿何なふする時ハ此上に家を与へ柄
まで弥平千石ニ為しる取立娘ハ御の実子として御に家督を与へ
よし所詮しられも甚き忠義之夫の志を感して親子揃る
娘他人に奉用捨す尼公様御恩し眼を忍ひ鳴泣の
三年を経て来之に携をもなる故に殺さすると見捨して涙
落と来色を露して云はれハ女ハ身の為せぬ娘に害ふくる殺
し様これくてかなしさハ暫く生る事を成ねし一味仕らんや

の安藝殿氏族ハ殊之外用心深り食事も大方ハ此殿ニ
仕度せられし宿ニ而請取せ時ニ人手ニ取掛自分於勝手ニ而藥鑵
せられ私一人手傳ひしせしが其證據大方茶ニ水を入様子ニ
有けれバ少しも疑ハなかりし所毒殺以て私當ハ何
ぶ候とも云ハれハ甲斐守て殊ハ何ニ年安藝の當分を見る
所にしの所へ此節茶を飲し居候し少ン氣違れ
色ふ致候事ニ存知れ親子共ニ此時也と思ひ覚んて事を
仕うぶせんと細ニ云含メれ女ハ彼茶一貼請て安藝の方へ
立帰りれ手を見れハ其翌日安藝ニ自分ニ服薬を煮食して

作殿ニ取られ当所ニ弥平の女房を指ニ而ハ彼ニ藥を
入置為安藝ハ時分隠り茶を好りしてほ呑人とせし干
茶瓶を見れハ私一存ニ而しるし有ふ寄ニ思ひ私早ハと隠
少れハ彼女がと著て私指を取为其顔色常ならず安藝
弥ニ隠ニ為りて茶瓶ニ水を入て酒をされしの側ニ煎立ける
男へ蓋をのて見るニ湯氣も而と立上る其日ハ怪我もなし
伊達安藝ハ今ニ思ひ其書ハ例年之枝腹氣為出る
とこ長ニ知り殿へり其上を飛何ぞ思ひ湯氣何ぞり
茶瓶ニ毒入れりし落て死亡りし安藝為殿心得て女を御近

始て我此度ハ美事ニ自心ニ於 桶石南来せしも先ハ由為さん
此問へ心労ノ数人さへ当者ハ其方計リ当座中ハ精兵ニ事然
為ニ存ハ火も消茶瓶ニ為り追々湯気立つゝ一て忠ニ死たる事
不審し玄方此茶毒味せよと云為れハ女承而して一気て
取知而藤ヶ笑顔ニ先刑為を以知し明候の其心及事
都邑て乱為り此為を知れハ我何ぞ油断せん哉 妻ハ承哉さま
取参候ニ栄を重りす居しと存四れて女ニ忠し取し候方
下ニ向状仕り候れハ西藤ニ情思し中て子ニ速ル親心得し
さ後ニ非まテ留しまし孫平 快哉てまぬぞ 押込座候ハ

如辞ニ懇し而為再ヒ保進安藤之先生為君ニ仕し勿
状まこ品川隠居ト下さ立りし七ヶ條ニ君事 書添而通
ニメ内指正殿ヘ君知し而為板倉殿被状讒之取日被并
大和殿ト阿部殿取り候れハ入世殿与りし当ハ兵部少輔ハ酒
井殿親し候縁者ニ而当成ハ西藤ヶ謀状而見て疑候成居
とやしかれハ板倉殿ニ重而責ハ我ニ不承存も将軍家ニ指目
代としで国家ニ縣念を預りしたるハ我ニの可留ニ取存をも
大老之身ニ入役初ニ是政為之候始長自何ぞ非道非
理法様為之威徳取なりし其弱取を乱ス役ニ於て親ニ諫

隣をなして何卒以来ハ之苦患を免るゝに至る所也と存奉
ハ大和守扱自意として一旦ニ為ありし所て板倉殿ハ大
目付并に伊勢守黒川丹後守ト連名にて諸役人今又
止事を不得して於是評定に及ぶ所ニ寛文十一年三月廿七日
伊達安芸宗重評定所に召出され依て安芸式由ニ主
君亀千代品川後陰ニ我後奉ト上浅国表前熊田右ニと
して其身臆心ことなき一度に言合せ夜猶改め評定所に
原田甲斐松平亀千代家来伊達安芸を殺して其上使にし
上憚て平伏し其日之評判甚雖之而ニ之ハ

御大老
酒井雅楽頭忠清

御老中
稲葉美濃守正則

〃
久世大和守廣之

〃
土屋但馬守数直

板倉内膳正重矩

若御年寄
土井能登守利房

〃
永井伊賀守尚庸

〃
戸田伊賀守忠昌

〃　大目付
〃　目付

本多長門守　右後
高木伊勢守
黒川丹波守
大井新右衛門
妻木彦右衛門

右之面々御役人中威儀正敷御定也扨亦藝を見るに六十
近き男ハ半白威ハ威有て騒す色黒く田舎者と云様なる
座之者ても大に驕せ不流石元老之器と見へて云語静に
應對滞らす須之忠孝を納て弱曲之志なきを知れ侍り

先達而若年寄御座之節状を以順之扨是は御尋之趣
藝は上手無き之書道に無ク中ニ上手有て月並有て是に言尋而時
味は吾未練共其詞堂之としても我之流儀之如ク心之馳走を
甚る事ハ僉議之人も未だ似る事無り更之論を以て之詞無
ド上手成ハ該役人其大器を感して之有る中ニも板倉
内膳正殿思召も高声有て士氣を執撻職之烈強其威
猶嵩之如り其偉魏之如き威有て自康を無き事よと
称美して酒井殿をも言と見られしに酒井殿ハ
其氣高其器を立てられしには諸之英士退かれて言る之評定

も果ぬ事也

兵部大輔評定所へ召呼事

附 蜂屋六左衛門忠節之事

斯て面々之吟味有之処何分重なりしかハ或日兵部
大輔を評定所江召呼御役人中本多久世大和守殿
板倉内膳正殿御立会ニ而藝州之御一門ハ浅野因幡守殿
兵部下屋敷ヶ蔵甲斐と申者罷出事ハ安細之取計扱
之儀不審返答仕候ニ付其之比保家同甲斐ハ語不申候
届ニ付上意ハ大和守殿被申候ハ其評定之段申候ニ付退出

得時ニ板倉殿ニハ御尋之事一応承りしと何卒其芝ハ
人之御趣意ヵ詮議ヲ致候ハ何連ニ而も是非有無存候や尋ける
板倉殿重て仰ニハ被毒薬を用ひ罪なき人を殺害して
事叶ハさる間ニ召て其罪を他ニ譲らんとする逆意と明白なり
之者ニ忠臣とハ黒き家之者なりしに然れハ雅楽殿不
時之弁ヵ兵部大輔ハ案の外ニ而ゆるしと退出せり
併蓮兵部ハ其身科有り職之同様ニ相成是迄至り蜂屋六左衛門
を伴来得ありし評定所ニ参りしと申ける、ニ依而ニ六左衛門
兼て其ハ御殿之御用ニ相勤候而参り候と申ける事と申も右兵部

外記斗り連て於り右留蜂屋六左衛門又介安藤の方へ
行兼不申謂けるよしそこ云又申ハ安藤ニ御密ニ有けるに對
面有之ハ六左衛門申右留ハ柏も柴田外記其外譜代ノ家
思ニ候としも今初甲斐殿ニ権威ニ恐ニ付左様之由甲斐
守殿ニ人と思ひ候人仍ニ我ニ本心を被逆ニ紀不依外記と
存にし表向ハ柴田ニ隠逆意体と見え候へ共先以
近年酒井雅楽殿とて諸役人不残付届ニ事なしと
先例無之音物贈事ニハ掛兼返禮之文通返盃
様之威書西諸集並申候白候事も柴田外記

蜂屋六左衛門殿して忠臣ニハ心が備不申しと云ハ安
藤ハ波しけて肩を動かせしもこ覚哀なき者ハ一句端
人ハ何も存ニ難てハ不縁之志有家事と存る又権深き
可習何事も兼て弘屋ハ浅肉面何事工ハ浅思松前木之事
台も存雲存様之次第も又之服紙の衣と申しけれハ蜂屋
実は思議も見存事とも浅之事之外記と於
兄ト台せしハ鬼神ニも劣れましと立て臆之中毎氏之
を流石之甲斐守も此言に手て様子も我之存分之仕法せて
此生當年月之心を依を依家ふつくし其の先組蜂屋ましし

其徳川譜代之勇士として太閤秀吉公之列小田原陣し
御り家康公に附従して武勇を顕したりしを以先君
政宗公之読を以感心し案り深の三男に賞を請ふて政家
人之列に加へられ当家孫六が仮にも我之政宗に人先般之武
功有之子孫之賜原家道に厚りて後上ハ老母妻子を
人質として差出候疑晴し候事 然心悪敷案候世り
辞て見れハ安藝忠心解 此上ハ何の気も常去当ぶ
ても忠臣の事御君之為安藝原家長久之基
なりと悟って六左衛門を使て評定所に差出

伊達安藝原田甲斐初対決之事

附帰裁之事

時に寛文某日原田甲斐評定所に召出され伊達安藝と対決にな
付出候処甲斐申所安藝ハ段々を以被尋候処ハ原田畏て申
上げ候ハ主人亀千代様御幼少にして家督御続被仰付伊達
兵部少輔田村隠岐守後見に被仰付候処 但馬表之一族老
臣之単而妹之存在ハ由其上執権人江戸定詰と家風
教千年在村北家中之往望仕候而為家風之様にとの存念之近
く日々勝ち隠岐守常之存年之付政道者兵部少輔と執権升川

信ニ自案之筆某誤りたる事を心ニ掛候、何ぞ之自を
付弁を傾け得之して數年之間ニハ一言誤なる事以ましく
伊勢毒害ニ及ぶ事を大集へと仕る企私恣て夜々寄合ひ
一味徒黨を催し以之中抔黨之覚無之様ニてハ彼之党て不庸
無之謝及候安藝守殿執政雖とも信愛と存し居候ハ不思作様り
之て下不忠之御之忘れて何を安藝守へ能是を夜斗
之老臣一門遠ざかりにハ對能るニ案と一人抽て引継候處不審
之事故ニと其右正しく其善爲れハ酒井雅楽頭將監とし
て安藝へ忠貞之人ハ只甲斐のみ剣ぬを書て示しさく

覚てゐるへし上意を受けと信じたる者ハ執權之權威盛ニ疲弊と思て
唯一言之言を不以せ威之枝葉肉役正敷理非後世之進言是
ハ信共覚へ申聞しより代ニも天下之政道を紊り理非明
無之心ニ掛候とも信頼なき者具足之力之ても有之職分之忘
渇ニ誰か諫席中ニ具足有人さへ恐れ筆ニ及ひ之天
下之形を乱ス浪人としてハ不形をも打も武ハ勝之權威を
りて下を不恵さり心之信之事をも打正之福ふ者ヲ助
ケ己之諫言ニよりハ理を非ニ落さんとするもの有らん是大ニ天
下之大罪人なり誰ニ而も可捕獄にハ末之世を糾之中ハ有るし

備と云眼て行かれ凡井殿も其勇気に勝く面目に驚
かれしが板垣殿は気若やかに人威武と生無く執し笑て事
を御らず晴ず御前へ満て申上けるは甲斐逆羅先達て
御暇を乞ひ当飯千代に限りぬ只九孫案年以前に我
立ずして既に先んじ総家若気にかり諸に募り一門中御繼仕
儀御取扱年埋葬部は皆栄しが本は在業古今諸家恩
人にて坂生は其名は若ずにも人は常に諫を聴ずて我侭が
甚ず常に成に淡誅留て臓を相京ず初而逆罰之事
人とや合歎して嫌行進めさ世間を左とや以勝京子さ上郎

を抱へさせず逆罰に至て引出し栄を蒙ふり諸九乱ず世酒
乱して上にて料る事をして手討に其者は忠誠にして小枝を
し付々は全く耳に及逆罪道に政敗に行し彰行前て
英雄しとし上下共は久世大和守殿御前にて諸状を探
人に讃せ甲斐之尋ずふ只今は御前にて一人若気にて有り
諸士人之者さへ命を擲て身不て諫をして其者何とし諫
前に不及や甲斐若ず原意之流先陸奥守の御知る所の様
り付会弱丈備某之とし会殿に諫云が政故茶徳を
得心殿之分備私席して御殿寄於之無法書て於

見ハ不申候得ハ其御咄一向相止不申候
御茶事ハ不存候ニ付無據 御庵主へ申上候 猶又是非
不及仕合 私儀ハ不仕候所ニ而 猶又当年事
共是皆茶道の様ニ執心致候 何分修行致下さるへし
侍ニ茶之湯相應之男之由 承り候節茶之湯ハ一子の外不伝楽宗
習ひ申候 扨其後段々近頃ニ到ニ而ハ 侘茶之儀根
無元組宗旦以後 後藤をもつて 其方少も不存
由田成子網 甲斐守殿ニ而 所々而 取實之茶事 私茶隆
奥方 藩代之求人 しても可有之候 段々近年茶

右前ハ用事無之 相勤候上ハ茶之湯相應之凡情ニ候節
拵イニ而相勤 然も 他家ニ於ても中々如此候老中
人も茶之湯仕候 是ハ不可取 楽 兼而 主人之心ニ叶ひ
在之候 之月 所望入候事 共茶 奥宗隠 以下其之弟子
補遺 其通りに 早ニ 主人ニ不行届
世間ニ流布仕候事 残念ニ存候 御ニ而最上事 可有
ミミ様之中村四郎左衛門と云ニ而主人之為ニ 承り 強承り
平井之此方 何として 練候 甲斐守殿而本田
右に隠 奥方 初 も 申由 旧切 し 候 心易

之仕合ニ而右様之儀ニ及候ハしとハ兼て不存致候事残念ニ存
ハ浮世刀ニ而及見候ても此儀ニ深ク頼武士道ニ存候得ハ
ハ相手ニ無之候付御覧候而申上候ニ当安藝守ニ而も定て覚悟可在候
共とも弟当守ニ而御尋ニ近日伊藤平吉郎　条ニハ
振之処ニ殺害いたし候ニ付御見届被遊候は解死人ニも申し
付候刻平吉ニ恵不足申間敷ハ不足之し候ニ甲斐守而
不埒之裁許合ニ相成一分之我意を以て御政道ニ
候ハ人評定之上にて相究申候而兼而之儀御座候ハハ私事人ニ
落度ニ候ニ付座候とハ存候とも当安藝守ニ而取計候

不届之儀ニ付可致打三年書面を以て陸奥守を訴へし所
死罪ニ行はれしを伺ニ而能成候て御放免しに甲斐守ニて三年
上書いたしても揚屋ニ御役儀を退く事を願候し殺害ニ付
私早速職を辞して他所ニ被預置候人ニも宛候様御座候
重り不申宜しく思召され候ハ速而御政治ニ御座候ハ実と存候得共見届
其家三年死罪ニ至り候ハ可打是又御尋ニ不届致し候と益
弟当守ニ安藝陸中守一座を相手にし所見聞書等
不便ニ相成前ニ甚敷之程と存候を御吟味有之候ハ陸奥守弟当
其文ニ曰ク

御書拝見仕度候御目ニ申述候上ニ有之候節ハ國元ニ
梨子一折御送り下され候拙家帳残り一籠拙者方迄送り
下され候事ハ誠ニ謹ニ
存候乃ニ是ハ去秋之時之安藝より上候所ハ一生ニ忘候梁手紙ニ有
やと思召候下され候とも存候所ハ則甲斐之見せ申上候一同
見候所何れも揃候ニ手紙之文言之御人是ハ安藝之禮状何之
様之事ニ候之用之事以申遣候其元ハ畢竟安藝
も元来以之故ニ御婦方も存候事上候是迄之事
御勤中之下され上候安藝候之様中ニ一通不届之御座

下され候と存候所右之様ニ御座候是ハ懐中ニ小國之御役
酒井雅樂頭殿より存候候とも安藝ニ申遣候
是ハ武書を御認候て安藝下上候ハ甲斐方常之是三年の事
如斯ニ御座候國元之政道之義ハ古非法之様子之御座候
其外只何事も酒井殿之御取計ニ而如何之様之御座候
此書之手紙ハ禮状と同筆ニ御座候とも上ニ写其旨承申
上候所ハ武家ハ其ニ存之是迄之事ニ御無用ニ揃候以之武と
上ニ候ハ積定内證ニ存候田之事之為と承服如何之甲斐方
可存候由ニ能不行届ニ付國政之儀ニ是ハ如何

ト利貝方何事も剣を学ぶよしや武道を存知
幼き貝藏をみて主人を除も不入政を思ふ事一言罪重と
彼れ是れハ甲斐を取り而言を日傳て死ぬ人を先君の作り語す
持る人の私を以て神近く取扱ひしめの座を初め理ハ何か不存候
主殺しの儀も不存前後刀口に即ち御仕置有りとの事と
ト申る事も主人枝葉の撰みたまふる不敵にて貝方ハ思ふ
外理を開きし胃に但し我言に任せて天下を語る役人を云
掠人とせしや役者ハ陸奥守様の家の重宝を取り悪人能ふ
こそ方も重器を人に指置之二貝時ニ家来の盗ニハ我を非ざれ

一向剣を知る事也と油断ニ云て立居さへや況や兼て主人を
剣り守護せし人を更にして代々の政の理をとく状ハ誰か周の旦之威
主の補佐の如く細川殿の朝臣義光将軍を守られ
し程和漢ニ続きしも人臣たるハ身に代て重藏たるを
毎の様に存る事不及力とも申て夏ハ泳ぎても主人の本心
動乱行はれし時のハ願ハ人に罪非ニ譲る家の故に
係ニ而藝役一ッ利害ヶ条ニ余ル其方語ら桜て目の露
を悔て其掟と自身れハ流石東国も君子つもあるて詞
家し後に臣君先の若他様他剣ニ付武術とも藝の意

根已致悪人と申りし由云候得雖不ニ候得共第一ニ甲
斐父善兵衛安藝殿ニハ私も先年ニ寸皆要池之遺
仕ハ其地面ニ候ハ右忠宗之代我御不得宰去取以後為
来之両人郭り執之甚右衛門両人之能る明も代替りし之砌
勤ニも及届き何分折檻坐難立事ハ両端無御不申
始兵衛之諸役人評定之上双方人共忌仕ハ候為私一人ニ
可皆之為實ニ足又擬地割候り之節ハ目附役人共之忠
候遣度宜つて其最之被成ハ殿江村若右衛門志賀彦右衛門
須田平左衛門横山弥治右衛門とり一四人ニ之申不調候て段
右右衛門も後日ニ被仰付候ハ愛染ホ後難を恐れ安藝方へ
割ホ申之相談仕候趣安藝真直ニ一向難存不仕候由ニ而
江戸表へ之ニ不足ニ申送候ハ愛式殿存之而麦迄共も
私之不法之由申上候段不實候處ニと普請方ゟ七之房寿之ハ
反聞之謀を以安藝安房小重郎ホ不和之為ニして威を専
之人と申りし甲之者を入安藝を殺害せ人と計事
申し由此節何と候者共ハ甲斐父善了簡違之事一共下一訴仕
右此も及ぶ事私無之存不奇難題為候と申上て後ハ安藝
之向趣為候ニ付之談しとる處又三十一歳ニ而来番實之自

我に何之遺恨ありて非道之辱を恥果を衆に蒙らさんと
計らる事や近比不當用意成らん 但某数年奉行職
居て事を司る君家之為に尽さるゝのみは假令一命を捨
執らもせよ私欲を去て奉下之達する事不及篭之對
之書を送る事に於ては我又伊達家譜代臣為り退居
之用意あり何ぞ其職に及さる人数を豆州三年風波之小人
に欺しめらる人身退之迷を求らる某范蠡の小船に棹さし
して五湖之逸を隠千隠へし 昔元和年中何我ら
や其許婦人之如く人を妬む事に取紀ッて事の外を發し動きをし

忠臣とせんかと詞を発して申し申すは是ハ板倉殿に申され
後世を考へ為り安芸氏詞を守る両足ぬる招り甲斐守を
我眼にて居りしの良成て非道を以帰し原成とハ尋常之事
社其方に向ひて兵を為ましく又不敵之曲事と事
を争ふ也其果為に非之某只今限職を去して帰不候
感謝して人を出し成し来て争ふ是と云ハ甲斐守殿
之勢為に擬す成とも又社事然して候甚急き
せられよと安芸重て其様寝之神在之云つと云
しきの訴たる甲斐守呼て尋けるに及ばし其者我

能〻出藝せて其之不埒有之年積悪始
役之ニ状を具ニ告ケ知らせたり委細有之候處
論する之所ハ彼之不埒を咎おり引合へしと申出ル甲
斐あさゝ栄て間ハ石井申出る彼ハ之ニ致おれしハ彼三不埒
淫乱せしを誠ニ身のかれる之様成處り　近頃何諸
思ふ方嘆きより引合ふるまてもなく彼ノ三者陽ハ内ハ某
とハふ和歌之身ニふ様積りて江戸表ニ出張成難之
我おお奏　下府表ふ新仙台之親族ニ方ニ頼りしより
處し状有りれハ某事を正して且家ハ元より分り付る相

家し其上様ニ之懐りを採ハ候ニ志を遂せし事静在
己の身之積を求る謀計と存するも其分り知れ易く然る
共小衆小好之小人之行届せられ誠成ハ元而己家ニ之
隣之より家の井様之而原と成中るん能ら悪事せられ尤
昔之難之はれハ出藝頭懸り深り候役人中ハ向様人の世
実之人也ス和蘭陀猶三と留置人双方弁之るハ事ハ家黒家
之満足ある人日も疑不可別に家督之取ある先ハ合勺ハ退去
下府内事を見スあらふ之意と程屋内ハ淺井殿姫として
渋生之様候判ニ對決ニ退居ありし皆之事と同意せ

られ其日ハ手明く洩候ニ付居原田甲斐殺ケ宗之罷そ
夏て退出有之ニ而れハ法供も帰蛸仕候之而し

三月十日森對決之事

附神並三右衛門證据人之事

扨て伊達家之老人任緒来り有難さりしのさ云三月
十日兩人御評定所へ召出されケ様之観所味有而者小原田
甲斐遂(サイキツ)乗當ハ先日申ニ有れ共御通有之無事神並三
右衛門とや申者引出し並さ申つり詞之書造る其を證云
差老之詞を絶して原役人様方へ可被成之原役害

龜千代殿ニ迄悪逆之段何共存心得有様とと上
而れハ安藝守并三右衛門寺人見届候程并證拠せし
と被申候得共三右衛門儀篠恭ニ地役り并然加り其申無者
某何ぞや兵衛殿并當年ニ至ル迄上列合徳ニ遺又且
家一人ニ非ス原田甲斐儀鰐貝郎兵衛を殺害并蜂多り告知
らせし事無義之遠慮以之事有之し其丈ヶ申て罪科
をも被成候とハ甚以非道其事有之之候と云ハれハ甲斐申て何
を笑被成候ハ某此儀ニ付不對して不審を以て誰申候けれ
よ夏人旧家ニ而れハ他藝者之一族ハ原田殺害やたし右衆

の大事を強くも取り一人引請て自害し
西の一向知らぬ様なる所存ハ如何成事そ是等も
不忠者なり諫書を作りて佞人を集め某を恨み家の衆
落さんと計るが如何成意趣成や我小身にて是ハ不忠
の者にて御家の旧労を為る一門中一番の披露せし由家臣
其佞悪の両人は我身に不足恨を取り上る
主の為なりしに当身に取り柔を顧みは是迄にも自讀に進み
其身不忠にて身に不有りの主人の非を礼さんとせし身にて
非を公儀にて如何成訳ぞや御為を思ひ諫書を作り

佞人を用る事其身毎度種々是を行ふ我其家老
を乱し諸人を禁じ佞人を扶けて国乱政事を存亡諸人之弁
佞悪の両人相談せし某一人為事を取るハ随分異味なり
其身お公の非を云しも是に乱れ候雑事取扱可成るて
只今の忠言御為に存じ是甲斐不忠者に而忠言之段に
異味を述子細を色ハ心得ぬ事なり其身ハ甲斐一人之
下知を心得て居る々天下之評定所に而諸人を蔑之
不当一言ハ礼なり是ハ不忠者なりと言ふ事凡ハ甲斐に
源氏之笑をも御為を思して居月附書出来

存念ニ候而私見候遠背仕候事私共儀ニ相見候只今
御意ニ而御座候事何ハ申上ル処実ニ有之候様子
細御申ニ而形容仕候儀此事ニ付御不審ニ思召候ハて
御義評ハ後御堪忍被下様仕候とも申訳ハ酒井殿様
ニ座候ニ而強難心得申候ニ難儀後日ニ而も一理有
事のみ思て侍人とハ不覚不審ニ劔羅料ニ仰有
上を斗り常ニ申ニ寄候ニ些ニ逆意申ニ処へ之と存候
を調へ見人有之ハ不存候一通而向後ニ大切之一生之事ニ相
候ニ若ニ浅人事ハ元ヨリ私一人ニ而御丸をも事を遂

其論なく答とも候て御座ニ付此段ハ御縁組之義表ニ而一
列ニも上座ニ而御不得止一味徒党之後難を忍ひ一人事
を顧りハ候て是迄私之恨ハ申ニ不及候ハ情なれ
も四五度ニも無理ニ相願縁し発露ニ思召候ハ當長之處
ニ而毎ニ懸ハ心底ニ存候而毎事ハ上意ニ御座候ハ殊ニ
而も甲斐殿ハ御座候ニ付ハ遠慮致様ニ奉存候
致されハ若輩ニハ不調法ニ而致候思ひ侍され候人事
必定之様ニ其外何事も無之代候ハ其一と覚悟仕
私儀事を顧りハ其父付ハ而ハ近年兵部大輔甲斐

此度ハ仙台表ヘ年寄役仕置之以助伊達安芸之役ニ付未熟
之様到而諸之役を免し仕置之者も存じ兼雪細ニ上さる
ハ勿ても礼を相尽し論所不審を承り候節具ニし
上ハ当付一天下之為之事ニハ酒井雅楽頭様之仰せと之
第之得ハ九雷之如く驚く参見之如く思案而仙台
表之家役忠節仕り共ハ兵部少輔子息亦此事ハ原
無年原縁ニ候ハ兵部大輔仕置ハ悪しと存ルもの
無之者り雅楽頭様之原下知ニ候共其事細ハ何も之下
知何之人若し当原雅楽頭様之仕忠恨み今之原内意

と申候此之躰覧読之入ハ書面之も原老中より御依之出羽守
輔明首迄是之訳ニ候共雅楽頭様之表下之背き申之存其元
上部下も之統大老之原当様へ尋ね下さるべく若和原去る
存来て原甚以て承下告と存とやうホト告れハさしも
の権威之酒井雅楽頭殿直面亦京之れ顔之理屈承り候
勅様之余地為存様之事もあんへ而申之御留守之私へ
我と存候共之使之仲若と発見へ亦而留至原田甲斐と以て
之を見へて諫易し属之事申して何とか原田振り合る伊達
遊り存して先ん日も之事ハ後様へ三度之問役存知し原乱

明に下り給ひしと上京あれハ酒井殿にも参り将軍にも申されし
承りハ是ハ容易ならぬ大事と思ひ早速諸役人へ立廻り
此義甲斐守へも諸人共に承り及ぶ所ハ旗頭も捨置難く
若此義聞せし時ハ何人かをも分る事をも定め置しとて
少の口に板倉内膳正殿ハ其儀を風情にて速に捨置ハ根を
堀り葉を枯らす如く無用に致し諸人何れハ其由を聞かれて承度
内膳正の家老ニ鐵人といへる者ありしと右衛門も其由を聞き
を立て右甲斐ハ楽に口を開かせしと思ひ居たる眼にて諸人
や其者ハ彌殿ニ事思ひありて不斗引結りて身の上

家老ニ伝額を隠し何もへ行しと思ひしに能く
甚ハ此有りて極く謀計をなし正史の才として君家を
即ハ而して奪んとせしに今日も又甚て何事をか申さんとせしや
不届の事云ひ止めと大に怒り隣室より一生の浮沈成る
と覚悟極めし事奇なれども暁せは御笑ひありにて
て立派に御前にて此上ハ申し上げ事よく諸播磨殿上ハ争ハ
甚しく大坂に甚又子孫に至るを好み云ひ殿我にも
家臣を知らぬ者とし果を見るに忠を削られん盗賊し
悪名を附られ又ハ手討に致して君を殺さんとする事逆

謀之と聞ゆれ唯一人終り今ニ居る事を見た我
侍之存命之義ハ是ハ逆意之組せし罪を悔て不忠之事
として仙庵ハ思ひ切姫君之館あ藩殿ハ段々横様之
為連判状を持参せしと云事ハ甲斐守殿傳條
思ひもよらぬ奴ハ血迷て狂之大事をぬりけれ共其不届
之用意之連判状何らんや或藩之謀書之上ニハ先達為
之推察ニ其之謀事たるをかと云事ハ一言々申も愚なる
依而ニ其連判状計り證拠となし其ハ面々之心根ニての
として何一ツ之證る事有りしハ當日之證拠是

判不之罪せしを其元兵右衛門人ハ数多有る果なれハ
ハ存ニ寄る處とも證拠なしと帳中より證文或は兵部之あ
藩之渡元ある藝者衛門を渡せハ表衛門板倉殿ニ渡さる
内膳正殿なると讒上申す其子細より

契約一札之事

一 此度御曹子亀千代毒殺之事首尾調ひ之節は
新恩として其元に三千石同苗郎へ弐千石
宛行ふへきや為後日如件

寛文七年九月廿五日

原田甲斐之判

伊達兵部少輔判

大場道益殿

判入一札之事

一 悪之所之尾以毎し亀千代殿毒殺ハ或人

ニ三千石ツヽ新地可宛行ニおゐてや

寛文十年七月十五日

原田甲斐判

伊達兵部少輔判

神並三右衛門殿

荒木弥久殿

是ハ或毒人毒殺せられし外死體之様之寄麦三右衛

門庄ハ月貝岩氏神子他人露顕之間存之所何と奉存

り道之納メ差上し今日之證據と成之御吟味之処甲斐

之依頼而ハ当ル甲斐所望ニ以右出之則セ上座

而安藝殿謀書を用ヒ東を露顕之治人と證跡を存する

ニ而不承ハ天運不敵之由ニおゐて所拠後日ニ

書類を合候付之儀為其之由為双方退散所毎ニ而有り

酒井雅楽頭殿屋内為之事

附原田甲斐所計之事

亀千代君御仁心之事

附松前鐵之丞赤川権六を生捕事

然ニ對決之有度ニ及甲斐兼而之を避して密謀をめくらし
且ハ雅楽頭殿を後楯ニ頼而奸謀を成就せんとせしか奸謀
不忠役を宗として道理正敷演説有り詞サラリと更ニ無く
酒井殿詞後覧有りしよ用心とかわれ有る時
之諸役人中ニ酒井殿之権威ニ恐し只心底斗りを述
誰壱人進而此裁許せし人もなし板倉殿而一人是
善悪を糺されける事真之儒自然と明らかなり

しかハ酒井殿利有ハ始終不叶と察テ伊達安芸殿を
無き者ニ無礼しつゝハ早速十一日之夜亥之刻物ニ而有を臨
し酒井殿之館ニ密談行事ニ入て對面し寄合小雅楽
頭殿縁ニ而有ハ梅も此度之儀続而ハ宮内少輔初め有る
事なれ共諸役人共年ニ素ニ思して来り決く落着しに
然れ共對決之有度ニ至る之を恩せし人口寿に天下之政治
としてハつゝまれて其冬ニ裁量之へき旨御伝も有し置之板倉
内膳正の可ニ當家不仕しハ不足迄非決之事を糺さん
とニ心底有し此上ハ甲斐强し理不立罪ニ付之間ハ

足下之一子大郎申ト云も悪名を遁し甲斐不能々之罰不能之
分別なきハ甲斐抔前ニ而不覚ニ能く窺讒せら
れよ云不能も有りし子之あ言を推察不取敷思ひ、
仕る事に申ものハ畏て宿家に帰り急ぎ甲斐を呼入て
密談仕るれハ流石之甲斐も今ハ詮方なく亀角尚
二者を入てある藝を殺害せしめんと申す了簡なしと味
ここ中其を以て肉法ニ惡し速やかに破先と仍集
め右之者を以てしト頓にハ是迄之披之仕相し氣飯
れしてゝ之能様合ト云ニ而来り寛之京八松六通

力量沢人に勝れし其上之術を得たりし男進めし
有るハ人間平年一郡と中の物見之者様にて平十七歳
東市も有りみるに脈座之紀仕ハ事し壱人之隣ニ行出
入を有る所に直に之居震義有るもの有りハ三年之留下
を縮め家藝を殺し下甲斐者て子息後々之氣
遂其ぬ我浪人として急殺居之間ニ終に之果さ
れ檜六ハてしていやく摘出死後に居るを更にあ使不得
然其廢義聞り肆に落しうて使より京下を探索し
甲斐強壮を持ちて棄之男不男其心ある者ハ仕を示ちん事申し済

定なり迷ふ弱女婦に節〆寡婦を手入て居る方
我藝を売る尼能者なるに至ハ其弱敵思ふ本望なる
此氏上は京にも帰子息も共に其身世治り心を定さ
せよ尼ちなる藝氏等ハ甚用心せし由なれハ万一運称く
仕損じて居るなりとも何にもの仕業とせんと疑せん事治定
し時に見方とハ其弱殿我尾に娘にも於て手入迷ふ方に
抵此しに彼娘容顔美麗なる及様に於ける遊敵に迷ひ惑逢
養に徒せしも知能なハ無之條手下我藝の為おて見せなれ
よと怖る之緒に引に引此如く尾と成者に目を掛り

揃ゑ、何卒常より我藝を殺害し其身も出家
成形に如り出るに尾ふし係る恩愛深き我藝なれハ一応にて
ハ仕兼せ有る抗問せんと云ハ其時是を見せ居しとて先ん
年見知し謀書作らし中田小平治と云ふ者に於て
於手段を能御覧ある其後東川へ那く謀書一通
書せ懐に入れ置きしに其母も最方役なる我藝心を窺なる時
ハ殺害せんと大成強引平尾に属し、たるも目前成ると細に
申含め此ハ様々委細申含を捨て仕るに何にしも如く
き事ハ尾事とふ敵にも性は一生に尽ふ宿銅の脈にして

私宅にこそハ帰りけれ

亀千代君御仁心之事

附 雲前家臣之助赤川検六を生捕る事

時に寛文十一年二月十四日之晩方ゟ雨降り初之夜に入て
大雨降りしきり風音も烈しく物騒しき頃
なれハ検六ハ天の与へと悦ひお藤の方へ忍ひ入此夜風雨之
烈しけれハ忠臣之面々亀千代君之御機嫌伺として
夜中相詰ていたりし處中に蜂屋六左衛門君之御寝所近
二騒々事ありと蒲萄酒を献して自身毒みして指上けれ

亀千代君悦ひなされ召上へ給はんとせしハ又綱宗之御所
作の御胸悪しく成られしハ深く不審しと思ひ給ひつゝ志之介
呑へしとて残りハ松前浅尾を始め皆之者も呑むとて相
果しは遂ハ御君不計給ひ為ハ命拾ひて義我為
若せしお藤へ手通つ候せなし其之拷気をさん出よ
と其及ひしハ保養にも数通しと御意ら当事なれハ御在之
大臣ハ何とも感し入申るの中にも松前家臣之内進出ハ
之御意お藤為之織之且露云するし某之御仕置
り御遠之残り捺条して御意之趣申し付へお藤を

心を定めんと座しと涙を袖に包み座を立て大雨
をも不厭御殿へと急ぎける所に伊達の御家老家重ハ老
人にて血気の心をも遠く気も勝し被雨所の頭重りて不快なりし迚帰
しも不為雨中に麻上下引着り来りしに松前侯の御家
て君に仁義の心を深く互に感し一ツ二ツ声をと也かけ申
候せられ身を挽る所に赤川権六酒を一ツ両社参にもとと覚
悟して御殿へ急ぐ思入相子付ヶ仕りしに相手
て両三左右にて急ぎも血気にて男子の志ハ何の思
急にも不及幸を捨るハ其何に細かの人と両立
其殺疏放住と等り其一文字に切入たり松前侯にと云
向捻る所の腕まかせと言引きて手もなく其手に付て背骨
照して刀まかせに言しかけ付松前侯の胸より背骨まで
斬りける思人の言ける小刀も已に何にて成りや応を伝よしくと
果して御刑ハ松前侯と共に権六の手に落て遣し一言も不申堂々
くと計りし松前侯何の恐もなく其手にと懐中より見
君ハ残徒に其無く冥見且ハ其家臣の謀書経に知恐
て此上ハ罪を云ふに詫状をせんとて八某の中に誤不立
其座に向状ハ是権六ケ所を力に任せてたに付て御刑ハ斯

川越ゟ成下候入ハ出羽様天ハ心ニ之人々
ミ兄弟ニ甚前様ニ而事ヲ掛リ一言モ無ニ何ヲか色々
とれニ候ニ白状ニ安藝殿ゟ不ニ入候得ハ行も評定所
（右連署ニ只今一通り御書）而ゟ上ゟ命ヲ請ル色
家来ニ召之ニ被仰付有馬ニ宿ヲ出テ其ハ年寄衆ニ相談之事
家来ニ而甚前民部ニ是非論ヲ追々いたし能登
人々ニ而捕へ候ゟ後ハ捕限り無ク候也

三月十六日安藝甲斐對決之事
附原田甲斐最期之事

酒井雅楽頭殿屋敷之事
附原田甲斐心死覚悟之事

扨も原田甲斐は最早仕損ニて古川檜六生捕られ毎人
逆喰ヲ家来共ニ諸方家来ニ酒井殿も此段ヲ使ヘ守隙心ヲ
若るしめられしの御内談をこらし月十六日急ニ評
定所ニて行ニ承知ニ而是ハ當日板倉殿定式ニ而所用日ゟ
酒井殿席へ計り移り轉ニ雅楽頭殿深ニ意有之事ゟ是ハ
双方例ニ此度ハ家来ニ而役人共席ニ安藝席ヲ内
無見通ニ板倉内證殿ゟ一人見へさりしは良心得と

君ニ於テハ酒井殿甲斐之向ニ候事当ハ先ツ百度対決
ニ及候処之様ニ元来海中ニ投ケ殺候者多シ左ハ猥リニ
詞を掛候事ニ而候と申候者共ハ甲斐も其心を察シハツト
計リ年役人雅楽頭殿又安藝之向候之難事ニ付を知
ラス年其子孫之数多ク相残シ由残リ候年ニ見ス
甲斐ハ其ニハ甲斐ニ申旨を書付ト申候へト
候者共ハ安藝殿ハ両ハ此度之議許酒井殿縁有
ニ親ミ其引て金銀ニ甲斐ニ事ヲ数年ニ及ヒ候
可申と申旨加上申候ハ穏蔵シ只としてハ不縁之様子

勝チテハ之取候所を思ヒ居リ候可申之由段ニ申越ス
板倉殿ニ而百日相勤候ニて其身を立之社雅楽頭殿
此節之思召と存候日ハ其之事ニ通リ候得ハ甲斐板倉
殿対之取ケ度思召之趣と申候を除ケハ理禮無之候ニ付御沙汰
初君御運保護之為代々之異神緑之宗社大明神ニ而候
原見すて申候而身下と嫌ひ候ヲ無リ其恩ニと御請
申て御援書物其之旨酒井忠清ハ其光と申
雅楽頭殿思召ニハ此度酒井文書リ其上ニて神之御厚山ニ
申上其書相渡候ニ而禅之句能援其後ニ而出来ニ越

誠危キ次第なり 酒井雅楽頭殿へ伊達安芸手控し小
差出之上ニ而列座之間瓶ニ而小寄斗りに而蔵掛る
家之書き替差上之事 始終詮議有之と深く請申之
言語ニ不出し申候 板倉殿并雅楽頭殿伊達安芸ハ別席
に於て別格之通り 板倉殿常之席へ差出し候所 酒井殿ニ而
原田甲斐之節右相済候由申上之其外之私宅へ帰へんと存候所
新役之彼是之様子相尋候処 評定後甲斐之指図ニて相成候ニ付と存
雅楽頭ハ上座と上座安芸之向き申候へと存候之し小
や信候之身として執権職当る候方へ相手済し候

限以之外危篭なり 書面之儀尋も尤ニ候得共ニ承ニ付
り差出候へ共 板倉之通り我等信義に而吟味を遂委細ニ
入念之事成ことの候而 安芸殿并ニ書付共差出候
之通り也
板倉内膳正殿 前之評定不案内之元 思召之上にも申候
用人助右衛門を以 公儀へ之段申聞候 原氏殿之案之席
又不及御沙汰 不思議なり
其後板倉内膳正殿 書面共随身入候評定之上評
紙硯を取寄 原田甲斐之手紙を書き写し判を甲

甲斐是非ハ取ル所若黒ニ書面三通ヲ以テ披露ス若上
たりし人ニ其名見へ元ゟ甲斐守たりし故ハ猶以疑ヒ
飯富兵部板垣駿河足ヲ謀書ト疑ふ虎胤とや(?)と怖(?)れ者
諸人雅楽助駿河ニ信繁(?)ニ出れ様(?)様ニ申時ニ当甲
甲斐遁去(?)し飯富ハ猶ニ伊達安藝ハ謀書ニ心を寄しと
相見へ秋山ハ見遣ハしけると云ハ然らハ安藝ハ由て一味紛無
駿河諸人ヲ生捕ニ遁れとて此者ヲ家ル市川権六たり
籠り(?)けれハ権六家ニ候ふ状を持参甲斐様(?)も筆山(?)
下知安藝ハ謀計故ニ其罪を弱(?)く給(?)ふ月(?)割不当ナと

甚(?)相(?)去(?)ハ相抗(?)問ニ仰付ハ秋山申聞上申候ハ雅楽
取忠消(?)ニ而家ハこ郎(?)ニ而無様(?)に付(?)相(?)て候ふしと
飯富ヲ是ハ甚(?)不申し合せし謀計安藝ヲ責メ殺
さんと云ふ家(?)ニ其時板垣駿河ヲ過(?)遣わす秘乃(?)得(?)
ふとり(?)様(?)伊達(?)駿河を庇(?)見(?)ハ挨(?)甲斐を志ゟ(?)而を向(?)腹の
此事(?)何ふハ不申(?)候其節(?)取(?)しと郎党(?)せしと事(?)執(?)抗(?)
問之機て雑(?)料人ヲ家ハ彼ハ新(?)保(?)足を向(?)させ候ニ対(?)
し若黒ハ当家ト分ニ新(?)姪(?)子ハ当家ハ心(?)ニ抗(?)
問ニ不及ニを殺し国家を不為(?)と云ひ大悪人

己ニ極為り人非人の命として毎度詞を勝り
罪なき事ニ大罪を待詳言申とハ己か事也と大ニ怒りて後
是れハ天命盡る所其の声甲斐か耳ニ百千之雷一度ニ落るの
如く剛毅なる大膽不敵之原田甲斐一言も不出面色
土之如く震へ渡て引縮まれ居る之小さくなれ居る
安きにしも如く見へて是迄多年之積悪忽顕れ候
明かなる故御手に附ひて板倉殿酒井殿之両殿ニ会釈人
とせし一言申立ル事ハ論ニ不及事ニ有之科之罪
科免れ難く其時ニ至りて伝ふれハ酒井殿退出之様

打返まとらし合退出ニ而只今云為亦甲斐之悪逆世上
ニ隠も不成人物の事ニ而社家ニ留まりまし

酒井雅楽頭殿寝所之事

附原田甲斐が必死覚悟之事

斯て原田甲斐是迄悪逆両殿ニ顕れして逃れ難く最早
ときに酒井殿寛容之仮用請ニ打かけられ樓ニ紫檀之
及禮ニは諸人ニ不思ニ刻ニ到日十九日諸侯人ニ也
然為也御解する所ハ伊達家の附原田甲斐の列ニすら
兼修体也取ニ付来る九ッ時早く宅ニ内評定仕度

依而虎之下りしと逆〈ゟ〉れ其年ハ何レ也難尽[illegible]
あり雅楽頭殿も家来蜜議をこらし此上ハ甲斐ニ益
ぶ役を進メ安芸を殺害させ其上ニ而甲斐を〈ゟ〉事
叶ハぬ也入し蕩気を付人と云しハ其事にても[illegible]し甲斐
も此節ニ至てハ白々敷して[illegible]者ニ而れ〈ゟ〉情を動しては
し思ふ思ひも有れ〈ゟ〉殿ニ酒井殿所存ハ此上ニ而ニも我之思ふ所
易くたて[illegible]れ安芸を殺害し根を[illegible]んと思ふ処メ
毎[illegible]免[illegible]安芸ハ[illegible]常[illegible]仕[illegible]
誠ハ末代迄之[illegible]家と思ふ大事を[illegible]して酒井殿に過

既ニ三月廿四日より廿六日まで一書御内々有之難為常ニせし
寛文ノ年ニ吉光之御腰物を御渡之其年此度伊達安芸
無尾能討りせて後之と一心ニ而札札能を抛て御相談を〓し
而も叶ハすと酒井殿所存有て人と被及事よ[illegible]候武篤
早速[illegible]て此間ニ密々に[illegible]
而申雅楽頭殿思召ニ而此段内評定之ニ而是非[illegible]
させ之の積りニ而種々ニ心配計りを巳つされ甲斐殿之[illegible]
白まで[illegible]延巳状[illegible]中[illegible]
[illegible]れハ伊達安芸原田甲斐酒井殿ニ[illegible]人と[illegible]

人中不残者席ニ至而ハ俳道宗匠ニ至り撥古月志と云
者有り隠居致され居る是も酒井撥斗昨為前之云
翁之補弟入門為后役附られ大夫重役人ニ而為生得
柴和にして歌書味有其心底に紀親之至者席
とある之抑又俳道并蕪董光ハ其古首之朝仕候して御撥
同断御君に目見せし而至而ハ西人其を乗り扉之触
ハ居りと詠来るに至りしと蓋後仕られハ乾千代撥氏
評を見て依挨拶也家臣共に依蕪取ロ出し而ふ之延
而生之勝しと後と投致し候浅園出前も近り候て氏

俳をも見て使不審に思ふ心を付し小乱急果ことして云
志有れ毎り時小書前詠之助并蕪書向稽之此旨事
古鉄甲斐遅鉄小依し其上為不今日之評定如用心得
さ在り不成と心を付れハ并蕪書有て打笑去れハ此者甲
斐親之聞召せし上ハ来総之所味致小極罪科重り中
居り其之能気を不変家しと蓋帰れハ録之如く心を安
せん為る心と経之面てハ保前勝て晩之続を人ると上し禁
小指ハ首ハ別而依心を指毎付届不居りと云来れハ成程と云
子宗りを文今酒井撥斗名附来る居さ由来れて皆分ハ

明てやス歸りけれハ松前ニ着て来ル形繪之日御ハめてたりと前
宗ヶ自陸ニ歸りけれハ旭ノ坐敷ニ着て人々の頭揃ふ中ニ
保進ゐ藝一人形ヶ儀ニ硯を如硯庭み帰れ折れ猪
ニ城へ参り一合ニ前之表へ出れぬ例之何角と思召
して懐中より證を出しまハりニ前へ出る時ハ容を正ス
事有之して尚ハ大印之辞之験有ふ所郭色を
出すり出けれハ合れハ是を見て誠ニ有之一束田村記帳を
書の寅刻時分より出来けれハ西藤書よりも直ニ係
を酒井雅樂頭へ執帰る松前志摩守人之白之自ハ随分所心を

時分ゟくしと云帰れハ西人も委細承知之由酒井
雅樂頭へ急ぎ帰る

織呂記之終